

1 目的

世界の人口増加や発展途上国の経済発展などを背景に水産物需要は拡大を続ける一方で、気候変動や過剰漁獲などに伴い、水産資源の減少が顕在化している。

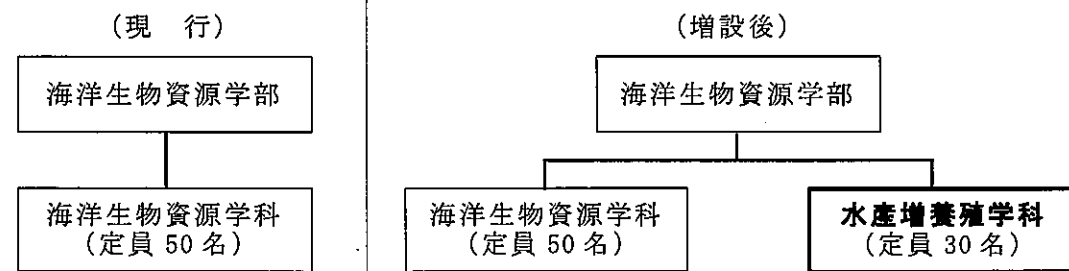
また、本県の嶺南地域は、リアス海岸を活かした水産業が盛んであり、若狭ブランド（若狭かれい、若狭ぐじ、若狭のさば）として定着しているものの、水産業の生産量はピーク時（昭和49年）の約26%に減少し、高齢化等により漁業就業者は減少傾向にある。

近年、品質が高く、安全・安心な水産物の安定した供給が可能な養殖への期待が高まっており、地域の持続可能性を支えるためには、養殖業の拡大により水産業を儲かる産業に転換するとともに、水産関連の起業や就職を促進するなど、嶺南地域の産業の担い手となる人材の育成が強く求められている。

このため、付加価値の高い魚種の導入や健康種苗の安定供給技術、AI・IoT技術を活用した育成技術、環境保全型の養殖技術から市場ニーズに基づく養殖生産物の経営および品質マネジメントまで「持続可能な水産増養殖」について専門的に学ぶ新学科を設置する。

2 概要

- (1) 名称 水産増養殖学科（仮称）
- (2) 組織 海洋生物資源学部に増設



- (3) 定員等 入学定員 30名
- (4) 開設時期 令和4年4月
- (5) 本拠地 海洋生物資源臨海研究センター（小浜市堅海）

3 教育・研究の特色

養殖事業者、水産試験場の職員等を講師とし、大学の試験場に加え、小浜湾などの県内の養殖場や、嶺南地域の食品加工施設での実習など水産関連施設等を学びの場とする実学体験により、学生が自らの将来像を創造・発見する力を身に付ける教育を特色とする。

- (1) 種苗生産技術の理解、技術修得
水産増養殖学概論、種苗生産学、水族病理学、遺伝育種学実験 等
- (2) 生産魚の育成管理の技術修得
環境保全養殖学、養殖環境分析学、養殖栄養学実験、ICT技術応用論 等
- (3) 水産物ビジネスの理解
水産物流通論、国際養殖ビジネス論、地域活性学、ブルーツーリズム 等

4 想定される就職先

大学における幅広い「持続可能な水産増養殖」の学びや実学体験、県内漁業関係者とのつながりを活かし、本県へ定着し嶺南地域の活性化に貢献することを期待

- (1) 養殖生産分野
養殖業、養殖関連機械・資材、餌料会社、漁業協同組合 等
- (2) 水産関連ビジネス分野
食品製造・加工、商社、水産物卸売・小売、外食 等
- (3) 政策、教育、研究分野
自治体等行政機関、教員、試験研究機関 等

5 施設整備費

約23億9千万円

整備地	施設	事業費	令和2年度	令和3年度	令和4年度
海洋生物資源臨海研究センター	学科棟・飼育実験棟新築	1,882百万円	設計	設計 建築工事	建築工事
小浜キャンパス	学科棟新築	506百万円	設計	設計 建築工事	建築工事

※1年次は永平寺キャンパスで一般教育科目を受講、学科棟等は令和5年度から使用開始

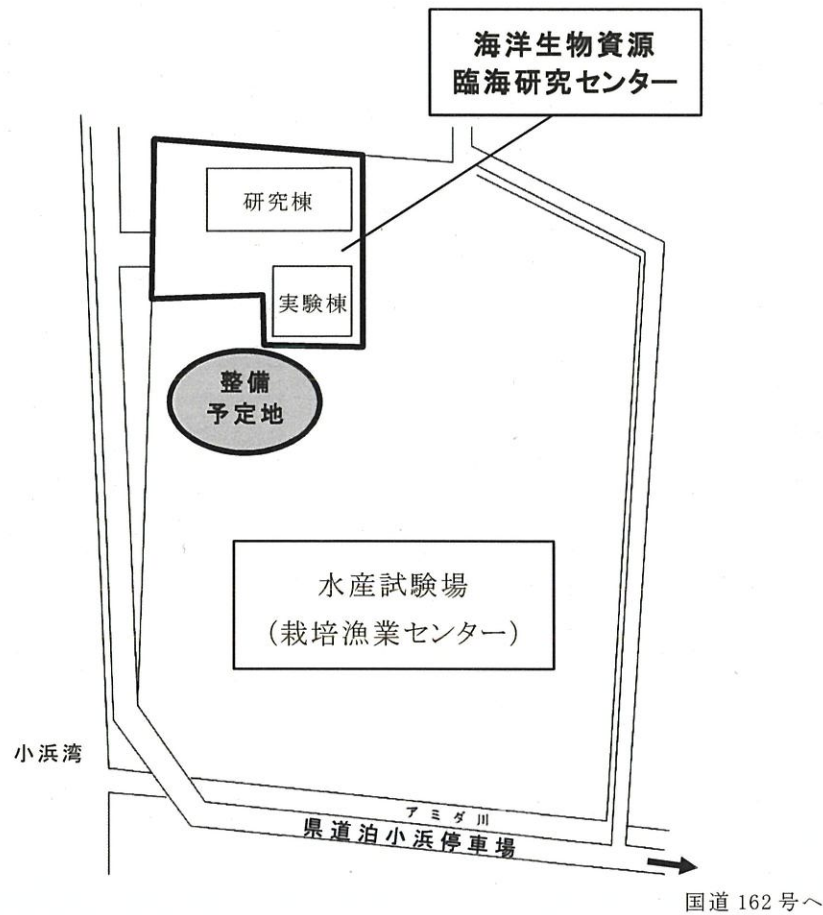
6 施設整備内容

整備地	海洋生物資源臨海研究センター（小浜市堅海）	小浜キャンパス（小浜市学園町）	
整備内容	<p>①学科棟 新築 鉄筋コンクリート造2階建て 約2,000㎡</p> <ul style="list-style-type: none"> ・講義室（30名収容） ・学生実験室（30名収容） 分子育種、環境分析、種苗生産、情報処理分析について薬品を使用した実験を行う。 ・教員研究室 ・学生研究室 ・休憩・交流スペース 等 	<p>②飼育実験棟 新築 鉄骨造平屋建て 約700㎡</p> <ul style="list-style-type: none"> ・培養・飼育スペース 実験用親魚や継代飼育等を行う。 ・細菌分析室 ・顕微鏡観察室 	<p>③学科棟 新築 鉄筋コンクリート造平屋建て 約700㎡</p> <ul style="list-style-type: none"> ・講義室（80名収容） 新学科および海洋生物資源学科共通の講義を行う。 ・教員研究室

参考：海洋生物資源臨海研究センターおよび小浜キャンパスの概要

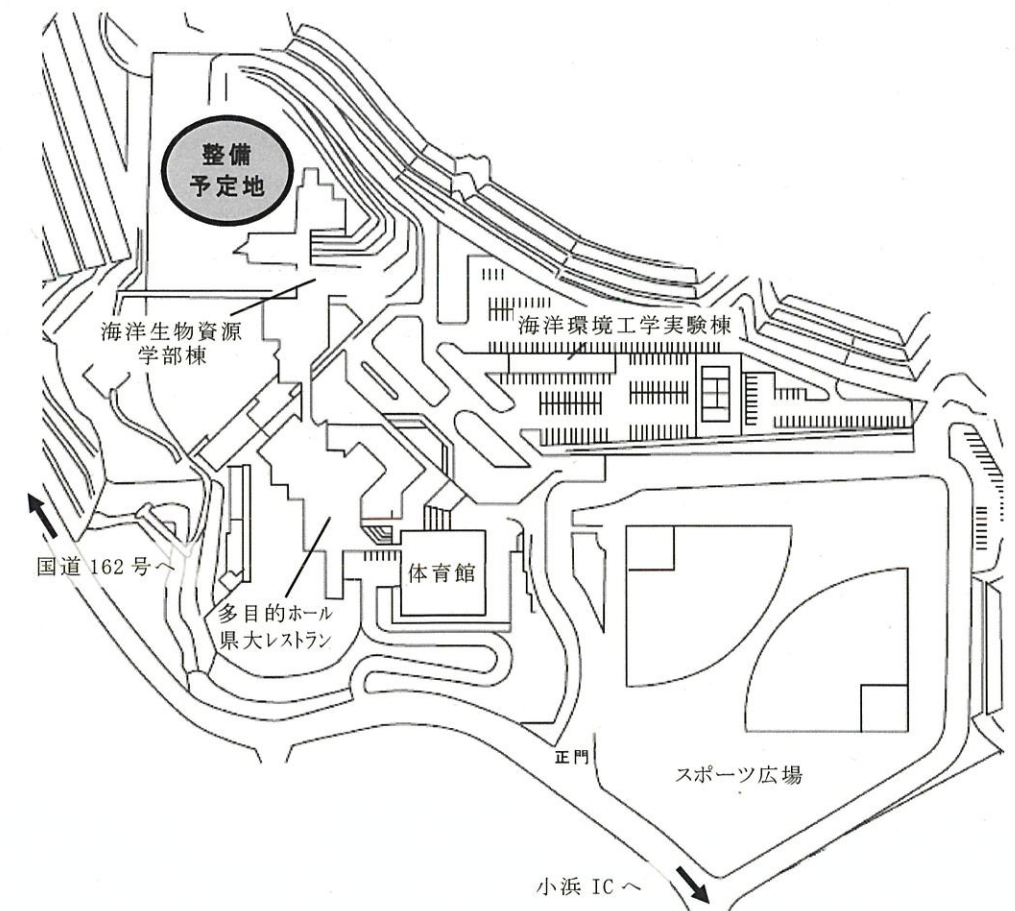
○海洋生物資源臨海研究センター

所 在：小浜市堅海49-8-2
敷地面積：約4,785㎡



○小浜キャンパス

所 在：小浜市学園町1-1
敷地面積：約50,000㎡



【位置図】